

Title	カトリック教会の経験から(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：パネルディスカッション「苦難に寄り添い前に向かう教会」)
Author(s)	幸田, 和生
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 106-112
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4920
Rights	


 The logo for SERVE features the word "SERVE" in a bold, serif font. The letter "V" is replaced by a stylized checkmark symbol. The letter "E" at the end has a small square box at its base, which is partially filled by the checkmark's tail.

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第二回東日本大震災国際神学シンポジウム】

パネルディスカッション「苦難に寄り添い前に向かう教会」

カトリック教会の経験から

幸田 和生

1. 東日本大震災に関するカトリック教会の活動

二〇一一年三月一六日にカリタスジャパンスタッフが仙台に入った。そこで活動の大枠が決まった。募金の受け皿を二つに分けること（教会のためと周囲の一般の被災者のため）、および、教会の施設を利用してボランティアベースを開設すること。

カトリック仙台教区（平賀徹夫司教）は青森、岩手、宮城、福島県の四県からなる。小教区五三、信者数一万六三五人、修道院三三、学校（幼稚園含む）・施設八八。

カリタスジャパンの支援のもと、仙台教区サポートセンターが活動開始。中心は教会をボランティアベースとした活動（塩竈、釜石、石巻、米川）。仙台教区では被災地域の教会へ司祭を派遣。信徒の被災者支援活動も各地にある。

日本のカトリック教会全体としての支援体制は以下のとおり。

長崎教会管区⇨岩手県・大槌ベース／大阪教会管区⇨岩手県・大船渡ベース

札幌教区Ⅱ岩手県・宮古ベース／さいたま教区Ⅱ福島県・いわきサポーターション
東京教区Ⅱ福島県・原町ベース／名古屋教区Ⅱ岩手県・釜石障害者支援センター
全国からの司祭・シスター・ブラザーの派遣もあった。

福島県では小教区の信徒の活動が目立っている（福島県の信徒は自ら被災者でもあるが）。

2. 東日本大震災の経験から

二〇一一年秋、釜石で、釜石ベースのスタッフ伊瀬聖子さんの話を聞いた。

「私たちは被災した方々に水を提供し、食べ物を提供し、くつろげる場所としてこの教会のホールを提供し、ここでいろいろな物資も提供してきた。でも、私が本当に被災した方々に差し上げたいものは、イエスの福音。津波で家族を失い、家を失い、すべてを失って絶望しかないような人々にイエスの希望の福音を伝えたいのに、それができていないことがもどかしい。煮詰まりそう。司教さん、そういう面での教会の指針はないのですか？」

すごく深い問いかけとして私の心に残った。

彼女は二〇一二年のはじめに何日間かの黙想の時間を取った後、あるインタビューに答えた（『福音宣教』二〇一二年三月号。オリエンズ宗教研究所発行）。その中で、カトリック教会のボランティアベースの特徴である晩の分ち合いについて、次のように言っている。

「晩の分かち合いは、心が熱くなったり、自分を取りもどしたり、新しい自分を発見したりする場でした。福音書に書かれているような出来事が目の前で起きています。ここから力をいただいて明日の活動へとつながっていたのだと思います。私と同じように感じた人が何人もいました。使徒言行録に記された聖霊降臨の場面をイメージせずにはおられませんでした。本当に深い分かち合いが行われていました。自分が体験したことを話し、互いに聴き合って、それを共有して豊かになっていく体験は、まるで初代教会のようだと、誰かが表現していました。」

「今、中長期的な新ベースキャンプの構想を模索中です。さまざまな団体やNPOと協働しながら、復旧復興の道を歩んでいきますが、その中であつて私は、何か霊的な次元での支援を探っています。私自身が救われたあの『よき知らせ』を、今、最も必要としている人びとに伝えたいではありません。その方法とともに考え、歩んでくれる仲間もいます。ほんの小さな共同体ですが、霊的につながって支え合えば、それができるような気がしています。」

初秋のころ、なぜ、教会内から宣教的ビジョンを含んだ支援活動の議論が始まらないのか不思議に思い、やや批判的に眺めていた一面がありました。しかし今回少し沈黙のうちに祈って気づかされたのは、実はこれこそが『私のミッション』なのだということでした。『絶えざる回心と刷新』によって社会を福音化していく使命を帯びた教会とは、あれやこれやの第三者ではなく、私自身のことなのだという内的な気づきでした。

千年に一度の、この未曾有の出来事の前で、もはや『今までの教会はこうでした』などとは言っていられません。垣根を超える時が来たのです。だからといって、人の心をノックして、『神さまはいますよ』、『信じよ、求めよ』と強要することもできません。

それならば、あの小さな分かち合いから始めてみたらどうだろうか。いのちを救うことができる神の存在を、どうしても告げ知らせていきたい。そうすることによって、ささやかながら、私なりの福音宣教の使命を果たして歩んでいきたい

いと切に願っています。」

これに尽きるのではないか。私なりにポイントを整理してみる。

① 私たちキリスト教会の究極的使命は、家も家族も故郷も仕事も、すべてを奪われ、失意のどん底にいる人に希望のメッセージを伝えること。それはちょうど二千年前にイエスがガリラヤの人びとに伝えた希望であり、福音である。どんな苦しみがあっても悲しみがあっても、それでも神は私たちを決して見捨てない。神は王となって、私たちを救うために、近づいてきてくださっている。このメッセージを伝えるのでなければ私たちの支援活動には意味がない。

② カトリックのボランティアベースで体験されたことは、毎日続けられた、祈りの雰囲気の中での「分かち合い」だった。分かち合いの中で悲惨な現実の中に、愛の体験、感謝の体験、喜びの体験、希望の体験があることを発見することができた。最初のころ、床上まで泥をかぶった家にボランティアが出かけていって、泥かきをする。最初は暗い顔をしていた家の持ち主の顔が輝いた。お茶を出し、お菓子を出してくれて「ありがとう」と何度もお礼を言われた。「福音書に書かれているようなこと」とはそういうこと。人が絶望の淵から光を、希望を見いだし、立ち上がっていく姿。

分かち合いは不思議な力を持っている。私たちの現実の中に神がともにいてくださることを発見する場。「まるで初代教会」、そのとおりで思ったと思う。

③ ボランティア活動の中心はガレキから傾聴へと移ってきている。

それは心理学の専門家が行うカウンセリングではなく、被災した人に寄り添い、茶飲み話に耳を傾けるような「傾聴」である。

その中で、被災者の体験に耳を傾け、共有するとき、そこに希望の光が生まれる。

カトリック東京ボランティア・センターが関わっている福島市郊外の仮設住宅（浪江町からの避難者）に身障者の青年がいる。いつも車いすに乗っていて、母親がその車いすを押し、集まりに出てくる。知的にもハンディがある。彼は「カリタスさんが来たよ」というと仮設の部屋の中を自分の力で這って玄関まで出て行く。「ボランティアさんが来るから、元気になるよ」と言ってくれる人もいる。被災者を忘れないでいてくれる人がいる、被災者を大切な人として寄り添おうとしてくれる人がいる、そこから希望が生まれる。

この、仮設住宅での被災者とボランティアとの「分かち合い」の中で、神がともにいる、という希望の福音が伝わっていくことを信じた。

④ これは新しく、古い宣教方法だと思う。

マザー・テレサの修道会の名前は「Missionaries of Charity」。私たちが伝えるのは、キリスト教の教義ではなく、「神は愛であり、神から見ればあなたはかけがえのない、大切な人間である」ということ。

⑤ 二年を経て、なお厳しい現実がある。岩手でも宮城でも。もちろん福島でも。

「分断」。どこも仮設住宅でも、コミュニティの中心にいた人はやはり力のある人。そういう人から仮設を出て行く。取り残されるのは力のない人々。

福島では放射能が人と人との間を引き裂いていく。福島から避難する人と福島に残る人。故郷に帰ろうとする高齢者と子どものことを考えて新しい土地に移り住もうとする若い世代。放射能の危険を強調する人と樂觀視する人。地震・津波の避難者と放射能汚染の避難者。大量の仮設住宅の住民と、もともとその地域に住んでいた住民の対立。

「切り捨て」。結局のところ、弱い人が切り捨てられ、原発事故の被害者が切り捨てられ、福島県全体が切り捨てられていくという思い。

「孤立」。仮設の中でも、人との交わりを見いだせず、孤立していく人々。特に男性に多い。パチンコや飲酒に溺れる危険。ストレス、病状の悪化、自殺や孤独死の危険。仮設から復興住宅に移るときにさらに孤立する人が生まれる恐れ。

そういう現実の中で被災者・避難者の方々に寄り添い続けることの大切さを思う。

3. 今後の働きを考える

「震災対応の中で見ることでできた教派教団（今までの壁を）を超えた、働きは何か。またこれからの一〇〇年後の日本のキリスト教の姿を考えると、今後どのようなことが起こって欲しいと願うか」という質問への答えとしては次のように思う。

一言で言えば、かつての教会は、教会の中に閉じこもっていた。そこから外へ向かうようになったのは阪神淡路大震災以来かもしれない。現実の人間の苦しみに触れる。そこに共にいてくださる神の発見がある。

いわき市ではカトリック・聖公会・プロテスタントの協働もある。

分断、切り捨て、孤立は被災地だけでなく、日本中どこにでもある問題である。その中で私たちは共にいる神を伝える。いやキリスト者以外の人と一緒に発見していくと言うべきか？ 私たちキリスト教会は、存在と活動と言葉のすべてをとおして、イエスの希望の福音の担い手になりたい。

(補) 原発問題についてのメッセージ

日本カトリック司教団は二〇一一年秋、仙台で開かれた特別臨時司教総会において、司教団として「いまずぐ原発の廃止を」というメッセージを採択し、発表した。

原子力発電は人間の力でコントロールできない技術であること。特に核廃棄物の問題は未来に重大な影響を及ぼす倫理的に許されない問題であることを指摘し、いまずぐ原発廃止を決断すべきであると主張した。その上で、無制限にエネルギーを求める生活ではなく、生活の転換が必要であり、福音的精神に基づく単純質素な生活の大切さを述べている。

このメッセージを語り、生きることが、福島原発事故被災者に寄り添うことになると思ふからである。